

三六二首である。

(10) 柿村重松氏に拠ると、『和漢朗詠集』中、作品が多く入集されている邦人には「菅原文時」・「菅原道真」・「大江朝綱」・「紀長谷雄」等が挙げられる。また、唐人では「白居易」が圧倒的に多く(一三七首)、その他、「元稹」(二一首)・「許渾」(一〇首)等も挙げられる(前掲〔注9〕に同)。上述した三名の邦人「菅原文時」・「大江朝綱」・「紀長谷雄」、及び「白居易」・「元稹」・「許渾」が当該詩句中に存することになるが、そのことも偶然とは思えない。

(11) なお、「排列の揺れ」と「詩歌句の有無」との相関性については本書中(第三章)においても指摘する。

## 第三節 雲紙本に見られる別筆

一

雲紙本には「鎌倉時代の筆とらしい」<sup>(1)</sup>別筆が随所に見られる。本文中、刃物による削消、及び補筆・傍書等が存する。目録・注記に書き足された所もある。

前節中、雲紙本と関戸本との関係<sup>(2)</sup>について考察を行った際、それらの箇所は考察の対象外とした。よって、本節ではその雲紙本に見られる別筆を取り上げ、考察を行った結果について述べる。本文における削消・補筆がなされたと思われる箇所（以下、略号を「雲別」とする）、及び傍書（以下、略号を「雲傍」とする）について明らかにし、雲紙本本来の書写者による文字の姿を探り、検討を加える。

二

以下、当該箇所について指摘する。その際、雲紙本の本文（全文）を挙げ、当該箇所に傍線を付し、諸伝本間の異同を示す。括弧（ ）内には、『校異和漢朗詠集』<sup>(3)</sup>から以下取り上げる別筆に関する同書著者（堀部氏）の記述を引用した。

以下指摘する事例の中には堀部氏が雲紙本本来の書写者の筆と判断されている箇所もある。その場合、「（堀部氏、「」を別筆とせず）」と付記した。削消・補筆が施されたと思われる箇所のうち、雲紙本の書写者が書いたと思われる文字（以下、原姿と仮称する）の痕跡が認められる場合は\*を印し、その形状を模写した。一文字内の部分的な削消・補筆かと思われる箇所も存する。その場合は※を印し、削消が行なわれていないと思われる部分を明記した。

■ 22 着野展敷紅錦繡當天遊織碧羅綾

①織（雲別・粘・伊・久・唐・2・卷・益・山・戊・葦）

## 絲(関)

〔堀部氏、「織」を別筆とせず〕 ※偏「糸」削消ナシカ。

■ 29 倚松樹以摩腰習風霜之難犯和菜羹而啜口期氣味之克調也

②啜(雲別・粘・伊・久・卷・益模<sup>4</sup>・定金・山・戊・葦)

## 噉(関)

〔雲本一本削りし上に「啜」と別筆〕

■ 60 歸谿歌鶯更逗留於孤雲之路辞林舞蝶還翩翻於一月之花

③更(雲別・粘・伊・久・卷・山・戊・葦)

## 處(関)

〔雲、不明。(雲別訂「更」)〕 \* 痕跡、「ハ」アリ。痕跡、「處」の行草体の一部か。

■ 66 臺頭有酒鶯呼客水面無塵風洗池

④塵(雲別・粘・伊・久・卷・益・山・戊・葦)

## 絃(関)

〔雲、不明(別訂「塵」)〕 \* 痕跡、一画目「ノ」(糸偏の一画目らしき画)・終画「ノ」アリ。

■ 83 花新開日初陽潤鳥老歸時薄暮陰

⑤潤(雲別・粘・伊・久・行金・卷・大内・山・多・戊・葦)

## 洞(関)

〔堀部氏、「潤」を別筆とせず〕 ※「洞」削消ナシ。

■ 93 誰言春色從東到露暖南枝花始開

⑥露(雲別・粘・伊・久・卷・山・多・戊・葦)

霞(関)

〔雲不明(上を別「露」)〕 ※冠「雨」削消ナシ。

■160 露簾清瑩|迎夜滑風襟蕭灑先秋涼

⑦瑩(雲別)

熒(関・粘・伊・久・卷・山・戊・葦)

〔雲別「瑩」〕 ※「熒」削消ナシ。

■179 緑何更覓吳山曲便是君吾座下花

⑧緑(雲別・粘・伊・久・卷・山・戊・葦)

緑(関)

〔雲不明(別訂「緑」)〕 ※「緑」の部分削消ナシ。

■266 霜蓬舊鬢三分白露菊新花一半黃

⑨舊(雲別)

老(関・粘・伊・久・卷・山・戊・葦)

〔雲別「舊」と訂す〕 \*別筆「舊」の「𠄎」(草冠)の下の部分(「佳」にあたる位置)に痕跡「𠄎」(「𠄎」の一部か)アリ。

■275 頭目縦随禪客|乞以秋施与太應難

⑩客(雲別・粘・伊・久・唐2・卷・下・山・多・戊・葦)

僧(関)

〔雲不明(別訂「客」)〕 \*痕跡、「僧」か。原姿、「僧」か。

⑪ 應(雲別・粘・伊・久・唐<sup>2</sup>・卷・下・山・多・戊・葦) 以(関)

(雲不明(別訂「應」))

■ 276 文峰案轡白駒影詞海艤舟紅葉聲

⑫ 艤(雲別・粘・伊・久・卷・下・多・戊・葦)

装(関・山)

(雲不明(別訂「艤」)) \*別筆「艤」の旁「義」の下の部分(「我」にあたる位置)に痕跡「**心**」アリ。痕跡(「衣」の行草体の一部か。)アリ。

■ 329 床嫌短脚蜚聲鬧壁猷空鼠孔穿

⑬ 嫌(雲別・粘・伊・久・卷・和<sup>1</sup>・山・戊・葦)

頭(関)

(雲不明(別訂「嫌」)) \*痕跡、偏の一画目、短く「**二**」アリ。旁、「**頁**」か。原姿、「**頭**」か。

■ 339 露滴蘭叢寒玉白風衙松葉雅琴清

⑭ 衙(雲別・粘・伊)

衙(関・久・卷・山・戊・葦)

(雲別「衙」) ※「行」(行がまえ)削消ナシか。

■ 372 晨積瓦溝鴛変色夜霽華表鶴吞聲

⑮ 零(雲別・粘・伊・久・卷・山・戊・葦)

雲(関)

〔雲不明(別訂「零」)〕 ※冠「雨」削消ナシ。

■454 瑤臺霜滿一聲之玄鶴唳天巴峽秋深五夜之哀猿叫月

⑯滿(雲別・粘・近・伊・久・卷・大内・山・戊・葦)

盈(関)

〔雲不明(但、別訂「滿」)〕 \*痕跡、「盈」か。原姿、「盈」か。

■485 醉郷氏之国四時獨誇温和之天酒泉郡之民一頃未知呀陰之地

⑰郡(雲別・粘・近・伊・久・卷・太・益・下・山・戊・葦)

郎(関)

〔雲、不明(別訂「郡」)〕 ※旁「下」(おおざと)削消ナシ。

■514 菰蘆杓酌春濃酒舩舳舟流夜漲灘

⑱濃(雲別・関・粘・近・伊・久・卷・和3・山・戊・葦)

〔堀部氏、「濃」を別筆とせず〕 ※偏「シ」(さんずい)削消ナシ。

■530 陰森古柳踈槐春無春色獲落危墉壞宇秋有秋風

⑲壞(雲別・関・粘・法・伊・久・卷・太・山・多・戊・葦)

〔堀部氏、「壞」を別筆とせず〕 ※偏「王」削消ナシ。

■531 臺傾滑石猶殘砌簾斷真珠不滿鈎

⑳傾(雲別・粘・法・伊・久・卷・山・多・戊・葦)

頭(関・太)

〔雲不明(別訂「傾」)〕 ※旁「頁」、削消ナシか。

■ 559 山路日落滿耳者樵歌牧笛之聲潤戸鳥歸遮眼者竹煙松霧之色

⑲ 樵(雲別・粘・近・伊・久・卷・下・山・多・戊・葦)

榛(関)

(雲不明(別訂「樵」))

■ 588 願以此生世俗文字狂言奇語之咎翻為當來世々讚佛乘之因轉法輪之縁

⑳ 咎(雲別)

因(関)

誤(粘・近・伊・久・山・戊・葦)

過(卷)

(雲不明(別訂「咎」)) \* 痕跡「心」(「因」の一部か)アリ。

㉑ 翻(雲別・粘・近・伊・久・卷・戊・葦)

轉(関・山)

(雲不明(別訂「翻」))

■ 621 晦跡未拋蒼径月避喧猶臥竹窓風

㉒ 避(雲別・粘・伊・久・山・戊・葦)

壁(関)

(雲不明(別訂「避」)) \* 「辟」の下の位置、痕跡、「土」アリ。 ※「辟」、削消ナシか。原姿、「壁」か。

■ 679 傳氏巖之嵐雖風雲於殷夢之後巖陵瀨之水猶涇渭漢聘之初

㉓ 聘(雲別・関・粘・近・伊・久・安・山・戊・葦)

## 携(卷)

(堀部氏、「聘」を別筆とせず)

■ 692 雖三百盃莫強辭邊土不是醉郷此一兩句可重詠北陸豈亦詩国

②6 詠(雲別・粘・近・伊・久・安・卷・太・多・戊・葦)

ナシ(関)

(雲「重」の下一字不明。別訂「詠」)

■ 695 寶雁繫書秋葉落牡羊期乳歲華空

②7 牡(雲別・粘・近・伊・久・安・太・山・戊・葦)

杜(関・卷)

(但、雲別訂「牡」) \*原姿の一画目、短い横画か。その短い横画の書き始めの位置に、右上から左下へ向けて払う短い斜画を補筆したか。 ※旁「土」、削消ナシ。原姿、「杜」か。

②8 乳(雲別・粘・近・伊・久・安・卷・太・山・戊・葦)

孔(関)

(雲不明(別訂「乳」)) \*原姿かと思われる「孔」の偏「子」一画目(横画)に「乳」の二、三、四画目「」を重ねて修正し、さらに、斜画「」も加筆し、「孚」としたか。 ※旁「」削消ナシ。原姿、「孔」か。

■ 698 愁苦辛勤顛頓盡如今却似畫圖中

②9 却(雲別・関・粘・近・伊・久・安・卷・太・山・戊・葦)

(堀部氏、「却」を別筆とせず) \*痕跡、旁は「」か。

■ 702 胡角一聲霜後夢漢宮萬里月前腸





健(関)

〔堀部氏、「健」を別筆とせず〕 ※「達」の部分、削消ナシ。原姿、「健」かとも思われる。

■785 寒窓獨臥無夫聲不妨蕭郎枉馬蹄

③5 郎(雲別・粘・伊・久・安・卷・太・益・山・戊・葦)

娘(関)

〔雲不明(別訂「郎」)〕

右に挙げた事例のうち、削消・補筆されたかと思われる箇所について分析すると次の六項目のことを指摘し得る。

- (a) 該当する部分は、和歌は一首もなく、全てが漢詩である。
- (b) 削消・補筆されたと思われる文字の痕跡、及び痕跡から推測される元の文字が、関戸本の本文(部分)と同一であると思われるのは、三五か所のうち一六か所あり、約四六%を占める(③④⑨⑩⑫⑬⑭⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲)。
- (c) 一文字内で部分的に削消・補筆されたと思われるのは、三五か所のうち一七か所であり、約四九%を占める(①⑤⑥⑦⑧⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲)。
- (d) 右記(c)の全て(一七か所)において、削消・補筆が施されていないと思われる部分が関戸本の本文と一致する(①⑤⑥⑦⑧⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲)。
- (e) 別筆(削消・補筆)と思われる箇所と諸伝本が同文で、その部分について、関戸本のみが対応するのは、二三か所であり、約六六%を占める(①②③④⑤⑥⑧⑩⑪⑬⑮⑯⑰⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲)。
- (f) 右記(e)の二三か所のうち、関戸本と諸伝本との間で偏旁冠脚など文字成分が同様である例、及び行草体が類似していると思われる例は<sup>5)</sup>一四か所であり、約六一%を占める(①②③⑤⑥⑧⑯⑰⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲)。
- さて、別の観点から、雲紙本と関戸本との関係について、次のように考えることができる。

(1) 諸伝本中、ある二本にのみ揃って存在しない場合を検討した結果、そのような二本にあたるものとしては「雲紙本・関戸本」が最も多い(一〇首)。

(2) 雲紙本に無く関戸本にある句↓三八句、関戸本に無く雲紙本にある句↓五句である。その無い句の全てが「脱漏」<sup>(6)</sup>とは言えないのではないか。意図的削除、もしくは付加がなされた可能性もある。

(3) 排列においては、諸伝本に対して一本のみが異なる場合を除外すると、雲紙本と関戸本とは全てが一致している。

(4) 諸伝本間の本文異同を調査し、同文箇所数について集計した結果、雲紙本と関戸本との関係は、和歌・当該箇所二八四か所のうち、二六五か所(約九三%)、漢詩・当該箇所七五九か所のうち、七〇五か所(約九三%)であり、極めて近いことが確認された。両本は単に本文が同文であるというのみならず、同文である諸伝本に対して雲紙本と関戸本との二本のみが一致する、いわゆる共通異文をも有し、その中には、特徴的な本文の共有が認められる。

(5) 雲紙本・関戸本の共通異文の中には、行草体を介した字形の誤認により異同が生じたことが推測される事例も存する。<sup>(7)</sup>

(6) 同筆とされる両本の書風・字形・用字には共通性が確認される。

以上の六点を踏まえた上で改めてさきの(a)~(f)の考察結果を検討すると、特に、(b)(d)(e)から、削消・補筆されたと思われる箇所(三五か所)では関戸本の本文と一致する文字が多く存するということが想像される。

### 三

次に、傍書について述べる。傍書は和歌二か所、漢詩四二か所が確認された。雲紙本・関戸本の二本のみが同文である本文に付した場合が二〇か所、雲紙本類の本文に付した場合が五か所、雲紙本の独自本文に付した場合が七か所、その他一二か所が存する。

傍書によって誤りが正されたと思われるのは五例(A)、脱字が補われたと思われるのは一〇例(B)、異本との照合によ

る注記は二四例(C)である。また、傍書独自の本文は五例(D)である。

以下、雲紙本から事例を挙げ、傍書が見られる本文に傍線を引き、本文の下の括弧内には当該箇所本文を有する伝本の略号を、次行以降には、傍書、及び諸伝本間の異同を記す。各項目の末尾には適宜、他の文献名と当該箇所を挙げる。

A 誤りを正したと思われる例(274・376・388・770・772)

■ 376 雪似鵝毛飛散乱人排鶴籠立徘徊(雲・関)

籠(雲傍・粘・伊・久・山・戊・葦)

籠(卷)

\* 『白氏文集』卷三十三「酬令公雪中見贈訝不與夢得同相訪」。当該箇所、「籠」。「鶴籠」とは、鶴の羽の装のこと。雲紙本・

関戸本の「籠」は、かわかめ、またはうみがめのことであり(『類聚名義抄』(観智院本)、「カハカメ ウミカメ」とある)、「鶴

籠」は詩内容からも誤写といえる。傍書「籠」は雲紙本の誤写「籠」を訂したのであろう。

B 誤脱を補ったと思われる例(7・192・480・533・588・591・592・745(二箇所)・786)

■ 192 遅々兮春日玉髻暖兮温泉溢嫋々兮秋風山蝉鳴宮樹紅(雲・関)

    兮(雲傍・粘・伊・久・卷・山・多・戊・葦)

\* 『白氏文集』卷四「驪宮高」。当該箇所「兮」。雲紙本・関戸本では「兮」を脱したと思われる。それに対して雲紙本では傍書「兮」が書き加えられたと見られる。

C 異本との照合を注した例(16・196・227・299・302・341・375・416・433・437・457・481・495・503・505・588・646・662・670・667・757・770・785・793)。

■ 757 范蠡収責棹扁舟而逃名謝安辞功臥孤雲而養志(雲・関)

    鞭(雲傍・久・安・太・山・戊・葦)

伏(粘・近・法・伊)

\*『本朝文粹』巻四「為貞信公辞撰政第三表 後江相公」。当該箇所、「鞭」。雲紙本・関戸本に「臥」、粘葉本の類に「伏」とある。傍書では『本朝文粹』と同じ本文「鞭」が注された。なお、「鞭」を有するのは十二世紀書写本群である。

D 傍書独自の本文例(30・376・399・405・771)

■399 漢主|手中吹不駐徐君塚上|扇猶懸(雲・関・粘・伊・久・卷・太・散模<sup>9</sup>・山・戊・葦)

祖(雲傍)

王(益)

「漢主」は漢の高祖のことである。<sup>10</sup> 傍書「祖」はそれによるかと思われるが、平安時代書写本には「祖」をもつ伝本は見当たらない。

以上、(a)本文に傍書が施されているのは雲紙本・関戸本の二本のみが同文である場合が最も多く、また、(b)傍書により、誤りが正されたと思われるのは五か所であり、その他については脱字を補ったと思われる例、異本との照合を注した例が殆どであることが確認された。

前項「三」における考察結果を踏まえると、本文を残しておきたいという場合、削り取るだけの確信が持てないという場合には傍書とし、訂正の必要があると判断した場合は削消したのではないかと考えられる。

#### 四

以上の考察結果を纏めるならば次の二点となる。

(a) 雲紙本にみられる削消・補筆されたと思われる箇所(三五か所)の元の文字について、その多くが関戸本と一致すると考えられる。その論拠には以下の三項目が挙げられる。ただし、それは雲紙本と関戸本とが極めて近い関係にあると

いう前提に立つものである。

(1) 削消・補筆されたと思われる文字の痕跡、及び痕跡から推測されるものと文字が関戸本の本文(部分)と同一であると思われる箇所が一六か所も存する。(2) 一文字内に部分的削消・補筆がなされたかと思しき痕跡を有するのは一七か所である。その一七か所の全てにおいて削消・補筆が施されていないと思われる部分が関戸本の本文と一致する。(3) 別筆かと思われる箇所と諸伝本の本文とが同文であつて、それに対立するのは関戸本のみであるという場合が二三か所である。

(b) 傍書、または削消かという点について、補足の場合は傍書とし、正すべきであると判断された場合は削消という行為に至つたのではなからうか。

(a)・(b)の推論が正しいとすれば、さらに次のことがいえる。

雲紙本と関戸本との本文関係については前節中、述べた通りであるが、削消、及び補筆・傍書等に焦点を当てた本論考においても、(1)両本の関係はより近い、(2)両本の書写者の漢詩内容の理解について不十分な点が多いことが考えられる。

## 注

(1) 堀部正二氏編著『校異和漢朗詠集』〔昭和56年 大学堂書店 P 21〕

(2) 第一章第一・二節

(3) 前掲(注1)に同。

(4) 「益模」は益田本和漢朗詠集切の模写とされるもの。近衛家熙(一六六七—一七三六)の手になる(小松茂美氏著『古筆学大成』第一四卷〔平成2年 講談社〕P 360)。

(5) たとえば、③「更」(諸伝本)と「處」(関戸本)の行草体に見られる字形の類似等。

「更」文 「處」文 (児玉幸多氏編『くずし字解読辞典 普及版』[平成5年 東京堂])

(6) 堀部氏は雲紙本と関戸本の「相互間に歌首の出入が存するのは、その書写の際の脱漏に基くものであらう。」とされた。前掲(注1)に同。P 21

(7) 書写者は、源兼行(万寿元年「二〇二四」少内記となり、承保元年「一〇七四」白河天皇大嘗会屏風を書写したことなどが知られる)が通説(小松茂美氏著『古筆学大成』第三〇卷「平成5年 講談社」P 82)。

(8) 「雲紙本類」とは、雲紙本・関戸本を指す(前掲(注1)に同。P 312)。

(9) 散書と漢朗詠集切の模写とされるもの。冷泉為恭(一八三一一八六四)の手になる(小松茂美氏著『古筆学大成』第一四卷「平成2年 講談社」P 374)。

(10) 柿村重松氏著『和漢朗詠集考證』卷下「昭和48年 芸林舎」P 3

(11) 雲紙本と関戸本とが誤写とみられる佳句本文をいくつか共有している点については既述した通りである(前掲(注2))。

## 第二章